

## 電話に翻弄される者たち

— 夢野久作『鉄鎚』、松本清張『詩と電話』、小林恭二『電話男』 —

*The People Who are Tossed About by the Telephone*

— *Kyusaku Yumeno "Tettsui", Seicho Matsumoto "Shi to Denwa", Kyoji Kobayashi "Denwa-Otoko"* —

黒田 翔大 *KURODA Shodai*

(芸術教養領域)

### 0. はじめに

2007年のiPhone登場によりスマートフォン（以下スマホ）の時代が始まり、2013年には日本のスマホの個人保有率は50%を超えることになる<sup>1)</sup>。現代においてスマホは生活に欠かせないものとなっており身体の一部だといっても過言ではないだろう。ただし、スマホの利便性は同時に危険性をも内包する。スマホによって様々な情報を得ることが可能だが、SNSや通販の利用時等に自身の情報を提示することになるからだ。

スマホの危険性を描いた小説として志駕晃『スマホを落としただけなのに』がある。『スマホを落としただけなのに』は『パスワード』という題で、第15回『このミステリーがすごい!』大賞最終選考に残った作品である。その後、編集部からの推薦を受け2017年に宝島社から文庫化された。

『スマホを落としただけなのに』はタイトルからも伺えるように、スマホを落としたことに起因する事件が描かれている。富田はスマホをタクシーに置き忘れ、運悪く浦野という殺人犯がそれを手にしてしまう。浦野は富田のスマホからクレジットカード情報など様々なデータを抜き取る。ただし、被害の中心となるのは富田自身ではなく、彼の恋人の稲葉である。富田のスマホの待ち受け画面に稲葉が映っており、それを見た浦野は彼女に対して好意を持ち近付こうとする。そして、浦野は富田のスマホを手掛かりとして、稲葉の住所特定やフェイスブックの乗っ取りなどを行っていく。このようなことが可能なのは、スマホにはその所有者に留まらない個人情報が多く詰め込められているからだ。

近年のスマホを巡る問題は『スマホを落としただけなのに』に描かれているように多々あるが、電話を頻繁に使用することにより生じる問題はこれまで文学作品でどのように描かれてきたのだろうか。スマホはネット接続可能で多くの機能が搭載されており、声による通話を行うという電話自体としての機能は従来よりも相対的である。しかし、かつての電話を巡る問題を見ていくことで現代のスマホの問題との共通項を見出すことは可能であろう。電話研究の蓄積はさほど厚くなく<sup>2)</sup>、声のメディアであるがゆえに参照できる資料が限られるため<sup>3)</sup>、当時の状況がある程度反映している文学作品を扱うことは有効だと考える。

そこで本稿は、電話を軸として扱った文学作品に目を向けていくことで、電話を身体の一部のように頻繁に使用することがどのような問題を引き起こしたのかの一端を明らかにすることを目的とする。1節で夢野久作『鉄鎚』、2節で松本清張『詩と電話』を扱うが、これらの作品が発表された当時は現代のように電話は日常的なメディアではなかった。そのため、電話を頻繁に利用する人物は特定の職業に携わる者などに限られていた。そして、3節で小林恭二『電話男』を扱うが、この作品が発表された当時は電話が日常的なメディアになりつつあった<sup>4)</sup>。それぞれの時期においてどのように描写されているのか以上の三つの作品を順に追っていく。

### 1. 夢野久作『鉄鎚』

本節では1929年に『鉄鎚行進曲』という題で『新青年』に発表された夢野久作『鉄鎚』という作品を扱っていく<sup>5)</sup>。

久作が注目されるようになったのは、1962年に鶴見俊輔が『思想の科学』に発表した「ドグラ・マグラの世界」の論考による影響が大きい。鶴見は『ドグラ・マグラ』を中心に『犬神博士』や『氷の涯』にも触れ、久作作品の根底にある世界意識の存在について思想史的な位置付けを行った<sup>6)</sup>。これを契機に全集が編まれるなど脚光を浴びるようになっていく。近年でも久作に関しては、例えば1989年に『ユリイカ』、1992年に『鳩よ!』、2014年『文藝別冊』で特集が組まれているように、たびたび注目をされる機会があった。

しかし、久作の作品自体の研究に関しては一部の代表的作品を除けば不十分なものが非常に多い。そのような現状に対して、伊藤里和は次のように述べている。

それにもかかわらず近代文学研究の分野では、大衆娯楽的な探偵小説あるいは明確な評価軸をもたない幻想小説として、久作作品は文学史の傍流に位置するものとみなされ、長年未開拓のまま放置されてきた。そのため、検証が充分になされていない作品も多く、その作家像の全貌は未だ明確になっていない。<sup>7)</sup>

先述した雑誌に組まれた特集に目を通すと、久作の作家論にせよ作品論にせよ『ドグラ・マグラ』に関する言及が圧倒的に多い。確かに久作研究において『ドグラ・マグラ』の重要性を看過することは不可避であるが、他作品についても考察を行っていく必要は求められる。『鉄鎚』は電話が重要な要素として登場しているが、それに目を向けていくことで、久作がメディアをどのように捉えていたのかといった点を垣間見ることができよう。

『鉄鎚』に関する初期の研究において、木下宇陀児は『鉄鎚』を「彼の最高傑作と称せられる氷の涯や押絵の奇蹟に較べて、優るとも劣るところのない作品」だと言及しつつも、「が、この作品は、どこが、どのようにして優れているのであろうか。そのことは、

実は、かなり説明しにくいことである」としている<sup>8)</sup>。木下は『鉄鎚』を高く評価しているものの、具体的にどのような点が優れているのかについては、説明が難しいあるいは不要だとしてほぼ触れていない。また、『鉄鎚』に関して言及した論考はいくつかあるものの、作品を単体で扱った論考はほとんどないというのが現状である。そこで本節は、『鉄鎚』において久作が電話というメディアをどのように描いているのかを見ていきたい。

主人公である愛太郎は父が叔父に騙されて金を奪われたため、父と二人で貧しい生活を強いられていた。ある日父は自殺をし、愛太郎は叔父に引き取られる。そして、相場師である叔父の仕事の手伝いとして、各地からの相場の情報を電話で受け取る担当をすることになる。そこで、愛太郎は電話に対して特殊な能力を発揮していくことになる。

大阪の青木という店は取引所のすぐ近くにあるらしく、表の窓や扉が密閉されていない限り、店の中の物音と往來の騒音とが、相場の読み声と一緒に送話機から入って来た。各地の天候が良晴で電話がスッキリとした日には、立ち合いの物音や呼び声らしいドヨメキまでも聞えることがあった。勿論それは複雑を極めた雑音の奥の奥から伝わる波動で、音響とは感じられない程度の感じであったが、そんな物音と、青木の店員が息に吹き込む場況とも重ね合わせて聞きながら、上り下りの数字を鉛筆で書き止めて行くと、その瞬間瞬間に、そんな米や株の景気に対するいろいろな予感が理屈なしにピンピンと私の頭に感じて来た。

愛太郎は電話から相場に関する情報だけではなく、伝達される音響や雑音にまでも耳を傾けようとする。それによって「米や株の景気に対するいろいろな予感」がやってくるが、その予感は後で新聞に掲載されているものと照合すると全体的中している。叔父は愛太郎を「電話の神様」と評するが、まさに愛太郎は電話から様々な情報を得る特殊な能力を持つ神様ともいえる存在なのである。

叔父は愛太郎のこの能力によって、大きな財産を築くことに成功する。叔父は愛太郎を重用するようになり、給料を上げるなど待遇を良くしていく。電話によって得られる相場の情報は愛太郎に限られるので、叔父は自身が相場で成功し続けるためには欠かせない存在だと認識するようになっていく。叔父にとって愛太郎の電話の能力は大きな価値を持つのである。

そのようなある日叔父は伊奈子という愛人を持つようになる。ただし、この伊奈子という人物は狡猾であり叔父を意のままに操っていく。伊奈子は叔父と生活を送っていく中で、叔父が相場師として上手くやっているのは愛太郎のおかげだということを知る。そこで、伊奈子は叔父に財産を全て愛太郎に譲るという遺書を書かせ、叔父に毒を盛り病死に見せかけることを画策する。しかし、叔父を自然な病死に見せかけることに失敗し、さらに叔父の財産を預かっている銀行は支払停止となってしまふ。そのような状況を知った伊

奈子は愛太郎に対して電話で次のように告げる。

「……妾……今から帰って、お医者様にスッカリ白状するわ。みんな妾が一人でした事だって……ですから貴方は……あなたは早く逃げて頂戴……同罪になるといけないから……店の金庫の合牒はイナコよ……サヨウ……ナラ……」

これを聞いた愛太郎は「このまま俺が逃げ出したら、立派な犯人が出来上って寸法だろう……ハハんだ……電話の神様をしらねえか……」と考える。愛太郎はその後警察から取り調べを受けるものの、何もこの事件に関与していないと一貫した態度を取ったので証拠不十分で釈放される。もし伊奈子の指示通り逃走していたら、愛太郎は叔父を殺害した犯人として言い逃れ出来ない状況に陥っただろう。

しかし、その後の愛太郎は自殺を決意する。

……叔父も伊奈子もシンカラの悪魔ではなかった、彼等を眩惑して悶死させながら、平気で冷笑していた私こそ……ホントウの……生まれながらの悪魔であった……。

ということをシミジミ自覚したからでもない。

伊奈子の恐ろしい死に顔を見た瞬間に、彼女の真実を知ったからであった。

眼に見えぬ鉄鎚で心臓を叩き潰されたからである。

愛太郎が自殺をする理由は、叔父や伊奈子を見殺しのようにしたからというのではなく、伊奈子の死に顔を見た際に「彼女の真実を知ったから」だとしている。この「彼女の真実」とは何のことを指すのだろうか。山本巖は次のように指摘している。

「鉄鎚」の愛太郎は、叔父が愛人にじわじわと毒殺されていくのを、知っていながら黙って見ている。その愛人は愛太郎に愛を告白するが、彼はそれを冷笑して拒絶する。そのために愛人は毒を飲んで自殺する。そして、愛太郎が自殺を決意するのは、女が自らの意思で選んだその死に顔に、自分への愛を発見したからである。<sup>9)</sup>

山本は愛太郎が伊奈子の死に顔に自身への愛を見たからだとしている。伊奈子に愛太郎に対する愛があったのかどうかは判断不能である。愛太郎は「電話の神様」であるから叔父に重用されるようになった。それを知っている伊奈子の好意が本物だとしても、愛太郎からすれば自分自身というよりも相場師として活躍できる「電話の神様」に向けられたものだと感じることになろう。伊奈子からの最後の電話で「あなたは早く逃げて頂戴」という言葉も、愛太郎がその時考えたように状況的には自身を罠に嵌めるためだと捉えるのが

妥当である。仮にそれが愛太郎を思っただけの行為だとしても、愛太郎がそのように判断することが可能になるのは伊奈子の死を見ることによってである。つまり、伊奈子の愛が本物だったとしても愛太郎と結ばれることは困難だったということである。

このような状況を導いてしまったのは、愛太郎が電話によって通常以上の情報を得る特殊な能力を持っていたことに起因する。そして、そのような能力を持つ愛太郎を叔父などの周囲が特別視したからである。電話で飛び交う様々な情報を拾い上げる愛太郎は、相場に関する重要な情報を支配する存在となるが、それが不幸をもたらすことになったのである。

久作は九州日報に勤めた経歴があるように「ジャーナリストの顔を持つ作家」<sup>10)</sup>であった。そのため、一般の人々よりも当時のメディアに触れる機会も多く、それに対する認識というものも久作作品に表れているのである。

## 2. 松本清張『詩と電話』

本節では1956年に『オール小説』に発表された松本清張『詩と電話』という作品を扱っていく<sup>11)</sup>。

松本清張は1937年から朝日新聞九州支社に関わる仕事に就き1942年には正式な社員になったという経歴を持つ<sup>12)</sup>。清張は『声』(1956)を「新聞社時代にベテランの交換手があったことから思いついた」<sup>13)</sup>というように、朝日新聞社時代の出来事から着想した作品がある。新聞社に勤めていたことから一般の人々よりもメディアに対して敏感だったという一面も持っていたであろう。

『詩と電話』は文藝春秋の『松本清張全集』に未収録であり、ややマイナーな作品であるといえる。清張が新聞社時代の経験から着想したであろう題名にもある電話に焦点が当てられた内容となっている。推理小説において電話の登場する頻度は高いが<sup>14)</sup>、清張の電話に対する認識が伺えるという意味でもこの作品を取り挙げる意味はあろう。そこで本節は、『詩と電話』において清張が電話というメディアをどのように描いているのかを見ていきたい。

清張の初期作品に関して、綾目広治は『面貌』(1955)や『陰謀将軍』(1956)などを挙げながら、組織と人間の問題が顕著に現れていると指摘している。

松本清張は、歴史ものの小説で、権力機構の中で生きざるを得ない人間の苦しみや辛さの問題を、家康や信長などのような目に見える巨大な権力とその周囲の人間というわかりやすい図式で語っていたわけである。そして繰り返して言えば、権力機構の中の辛い人生という点では、過去も現代も基本的には変わっていないと清張は考えていたのである。<sup>15)</sup>

清張の歴史ものの小説は、将軍とその家臣といったように分かりやすい形で組織と人間の問題が描かれている。権力者の好悪によってその従者の待遇が左右される。そのため、従者は権力者に対して不安や恐怖を抱きながら関係性を保つ必要がある。このようなことは、現代ではあからさまな形では表れないかもしれないが、組織の中で上の立場の者の気まぐれによって下の立場の者に影響を与えるというのが無いと言い切ることは出来ないだろう。ある組織や集団の中に生きる人々の不安な心情というものが描かれているのである。

『詩と電話』もこの組織と人間というテーマは関わっている。主人公である梅木は一年間H通信局に異動し、局長としてH市で本社に送る記事の取材を行うことになる。そこで、梅木は前任の村田からR紙の通信員である小林の取材力は抜群に優れていることを教えられる。H市において小林に取材で勝てる記者はおらず、全員が小林と取材協定を結んでいる。小林は下手に出る者に対しては自分だけが得た情報を多少流すが、そうでない者に対しては情報を一切与えることはしない。この集団の中において小林は権力者であり、他の全員は彼に勝つことが出来ないので従わざるを得ないのである。

そのような状況に対して新参者の梅木は反発し、小林に宛てて「取材の協定については以後は御放念下さい」という手紙を送る。梅木は小林を「たかが二、三流紙の田舎の通信員」と侮り、勝負を挑むことに決めたのである。しかしそのような中、梅木だけが前夫が一家七人を殺傷したという事件の記事を落としてしまう。

梅木はあわてて各紙をひろげて見た。地方紙はみんな出ている。(中略)するとこの記事を落しているのは梅木のA紙だけということになる、彼は蒼くなった。

煙草を一本喫って心を落ちつけて、更に検討すると、R紙が最も詳細で、他紙はその三分の一くらいの記事である。やはり小林が自分だけが先に取材したあと、各紙に知らせてやったらしい。小林との「協定」を断った梅木だけが知らされなかったことになる。

小林はこの事件の情報をどこからいち早く入手し取材をしたようである。そして、小林は協定を結んでいる所には知らせ、協定を結んでいない梅木だけには知らせなかった。このようなことが重なり、梅木は自身が取材出来なかったことを小林は出来たのではないかというように常に不安な気持ちにさせられてしまう。H市では梅木だけが小林との協定外であるため、一つの手落ちが決定的なものになってしまう。そのため、梅木は「朝の新聞を見るのが怖ろしく」なってしまう「小林ノイローゼ」と自嘲するようになる。

しかし、梅木は小林の取材力の秘密を発見することになる。ある日、小林が星野という女性と仲良くしている場面に遭遇する。その星野はH警察署の電話交換手であった。そこで、梅木は星野が事件通報の連絡を盗聴し、直ちに小林に知らせているのだということに

気付く。それから、梅木は星野の趣味である詩を利用して近付いていく。詩を共通の趣味として親しくなっていく、梅木は星野と恋仲関係になることに成功する。それ以後星野は事件や事故の通報を梅木に流すことで、星野は小林に勝利し続けることになる。だが梅木に満足感はない。

小林の、すっかり弱り果てている姿を梅木は思い浮べた。(中略) 今や、彼は魔力を失っていた。(中略) 今までの横柄だっただけに、神通力を失った彼の姿が一層みじめで孤独であった。

梅木は、こちらから彼に「停戦」を申し込もうと思った。そして以後は正々堂々と競争しよう。お互い白い線を引いたところから出発するのである。その時こそ、勝負の充実感に密着出来るのだ。

梅木は小林の「魔力」の源泉であったH警察署の電話交換手である星野を取り込むことに成功した。「魔力」を失った小林は最早以前のような取材力を発揮することは出来ない。この記者集団での力関係が完全に逆転したのである。しかし、梅木は「正々堂々と競争」することを望む。この梅木の心情に対して、細谷正充は「ラストに立ち上がる職業人の誇り」<sup>16)</sup>だと指摘している。

梅木と小林の立場が逆転したことにより、小林は以前と見違えるほど弱々しくなってしまう。梅木は自身はその弱い立場にあったからこそ、現在の小林の置かれた状況の苦しさを理解出来る。そして、自身の情報を得る手段というのは反則気味であり、他の記者たちと取材力を競うということが起こり得ない。そのため、梅木の「職業人の誇り」が立ち上がって来るのかもしれない。しかし、情報を収集するには自分の足で探すよりも電話で飛び交う情報から入手する方がはるかに効率的で迅速であることは明白である。また梅木や小林でなくとも、他の記者が星野のような電話交換手を取り込む可能性もある。つまり、梅木の考える「職業人の誇り」というのは最早成り立ちにくいものだと考えられる。

そして、記者に利用される電話交換手はどうか。梅木は星野に対して「自分も星野ふみ子を小林と同じように利用しているのではないかと反省」とあるように、梅木は小林に取材で勝つために星野と恋仲になったことに後ろめたさを感じる。星野はH警察署で電話交換手をしているため、記者にとって必要な情報に触れる機会が非常に多い存在である。そのため、記者にとって利用価値が高いわけだが、梅木の取った行動は星野を騙していることに変わらない。

梅木も星野も電話というメディアに翻弄されているといえる。星野は電話交換手であったため、梅木からすれば「魔力」の源泉となり得た。しかし、その「魔力」を利用し梅木は他の記者との取材に勝利しても満足感を得ることが出来ない。そして、星野は自覚が無いとしても警察署の電話交換手という職に就いているという理由で梅木に利用されてし

まっている。結末として梅木の記者としての誇りが示されることで終わるが、梅木が考える記者同士の理想的な競争の成立が危ういということが暗示されている。電話を用いれば自身の足で直接出向いて調べなくても情報を簡単に入手できてしまうが、それによる弊害はあり得る。清張は電話の利便性だけでなく、電話によって生じ得る問題性にも目を向け、それを作品に反映させているのである。

### 3. 小林恭二『電話男』

本節では1985年に福武書店から刊行された小林恭二『電話男』という作品を扱っていく<sup>17)</sup>。

小林恭二『電話男』はデビュー作であり、第3回海燕新人文学賞を受賞している。『電話男』はタイトル通り電話で人々の話を聞くという職に就いている主人公「わたくし」が登場する。1970年代を通して電話の中心は業務用ではなく家庭用へと以降していくが<sup>18)</sup>、作品発表時の1985年は電話が人々にとって日常的なメディアとなりつつあったといえる。人々の電話の利用が従来と比べて気軽なものとなっていく中でどのようなことが起こり得ると考えられるのだろうか。そこで本節は、『電話男』において小林が電話というメディアをどのように描いているのかを見ていきたい。

「わたくし」は電話男をしているが、それは電話で相手の話を聞くというものである。

電話をしたら、ちょっとした自己紹介をする。これでもう、あなたは電話男のお友達です。電話男は新しい友達も古い友達も差別しません。あなたは、辛いことや苦しいことを一人胸にためておく必要はありません。すべては送話口のむこうにいる未知なる電話男に吐きだせばよろしい。

電話男はなんの報酬も求めませんし、逆にあなたに向かってグチを言ったりすることも決してないのです。

話したいことがある人は電話男に電話を掛けて、好きなだけ語ることが可能である。実際にこのような電話相談サービスは個人で行われるものもあり、例えば神奈川県在住の西来という男性は勤めながらフリーで電話相談を行っていたが、相談件数が一年間に四千に及んだため退職し電話相談に専念することになったというケースもある<sup>19)</sup>。

電話を用いて何でも相談や話が出来るとするのは便利であるが、それは自身の個人的な情報が洩れてしまう可能性も否定出来ない。A氏という男は電話男に妻の悪口を言った日に、妻から次のように言われる。

「あたしはなんでもお見通しなのよ、このウスノロ・バゲオロガス」と言いました。

A氏は顔色を失いました。



その夜、A氏は例によって公衆電話から電話男のもとに電話をかけたのですが、その中でA氏は二十回ほど妻のことを「ウスノロ」と言い、更に三十回ほど「うすらトンカチ・バゲオロガス」としゃべっていました。

A氏は妻のことを「うすらトンカチ・バゲオロガス」と言うが、妻から「このウスノロ・バゲオロガス」と罵られる。A氏は電話男と妻が繋がっており、電話の内容が筒抜けなのではないかという疑惑に駆られる。この疑惑を裏付けるような偶然が何度か重なることで、A氏の疑惑は確信に変わり、ついに電話男を殺害するという凶行にまで発展してしまう。電話相談は便利であるものの、そこでの個人的な情報が漏洩しているのではないかと考えると恐怖を抱くことになる。

そして、電話男を中心に電話を使用する人々の間で「暗闇幻想」という症状が発生してしまう。

この、暗黒幻想は出現以来、あっという間に広まりました。症状は実に様々ですが、つまるところ、わたくしたちをとりまいている暗黒に不意に気づくという点では一致しています。他の症例としては、自分の発した言葉が電話線という暗黒の中を通ってゆくのだと気づいた瞬間、耐えられなくなってしまった、とか、電話機と闇との差異を考えているうちに気が変になってしまった、などというケースがあげられます。

一説によると、現在、電話男の八十パーセント以上、通話者の六十パーセント以上が何らかのかたちで、暗黒幻想にとりつかれていると言われます。

人間の内部には暗闇が存在している。その暗闇からあらゆるものが生じ暗闇自体には光を当てることは不可能である。たとえ電話を使ったからといってその暗闇を消すことは出来ない。そのことに気づき発狂してしまうというのが暗闇幻想である。

電話相談サービスの一つとして1971年に「いのちの電話」が発足している。それ以降利用者は増加しており電話による相談の利点も認めている。しかし、顔が見えないという欠点に対して「そんな頼りないふれ合いすらあてにしなければならない人がふえていることに現代社会の一端があらわれている」<sup>20)</sup>とも言及されている。

社会において人間関係が希薄化していくことで、電話男のように電話での相談を求める欲求が生じて来る。電話による相談は気軽であり便利である。しかし、顔の見えない者にしか気軽に相談出来ないということを自覚したら、現実における虚しさを抱くことに繋がるだろう。そこには何も確固としたものがないまさに暗黒が広がっているのである。小林がこの作品で示している電話に依存したコミュニケーションの問題性は現代とも関係性を持っているといえよう。

#### 4. おわりに

朝日新聞の「天声人語」というコラムに『鉄鎚』が言及されたことがある。

怪奇小説で知られた夢野久作の短編「金鎚（かなづち）」に「電話の神様」が出てくる。受話器から届く声や音の奥を鋭く察する10代の少年のことだ。株価の先行きから男女の機微まで耳で読み、運命をつかむ。昭和初めの作品だが、なるほど昔もいまも電話には人生を変える不思議な力が備わっている。少女は機を逃さず、公衆電話へ走り、硬貨を入れ、自宅の番号を正しく押した。2年という闇の長さを思えば、その沈着さ是一条の光のように映る。「電話の神様」も感心して空から見守ってくれたにちがいない。<sup>21)</sup>

誘拐されていた少女が電話によって救出されたという点は、電話の重要性や利便性を示している。しかし、常人以上に電話から情報を得ることが出来た「電話の神様」は電話を好意的に捉えていたのだろうか。

『鉄鎚』や『詩と電話』の時代は、電話を頻繁に使用する者は限られていた。しかし、現代ではケータイやスマホの所有率は非常に高く誰もが電話を日常的に用いている。そのため、電話の使用者が限定的であった時期に生じていた電話によって情報を得ることで生じる問題は、もちろん全く同じ形としてではないものの、今や誰もが経験し得るものになっているのだと考えられる。そして、電話が日常的なメディアとなりつつあった時期の『電話男』に描かれた電話によるコミュニケーションの問題は現代と通じる部分も大きい。

現代では電話が人々の身体の一部と化している。それにより生じる問題は従来の電話を巡る問題と一見大きく異なるかもしれない。しかし、電話を頻繁に使用している人々に焦点を当てた文学作品は従来から描かれており、そこに描かれている事柄は現代と連続性を持って考えることもできる。そのため、スマホ以前の文学作品に目を向けることは、現代の電話を巡る言説を考察する際に効力を持つといえよう。

#### 文献および註

- 1) 富田英典『ポスト・モバイル社会——セカンドオフラインの時代へ』世界思想社、2013年、p. 7。
- 2) 吉見俊哉、若林幹夫ほか『メディアとしての電話』弘文堂、1992年、p. 10。
- 3) 藤竹暁、水越伸ほか『携帯電話と社会生活』『現代のエスプリ』2001年4月、p. 12。
- 4) 家庭における電話の普及率が五十%を超えるのは一九七四年であり、それ以前は富裕層でなければ所持は難しかった（橋元良明『メディアと日本人——変わりゆく日常』岩波新書、2011年、p. 24）。
- 5) 『鉄鎚』の引用は、夢野久作『夢野久作全集』1巻（三一書房、1969年）による。
- 6) 鶴見俊輔「ドグラ・マグラの世界」（西原和海（編）『夢野久作ワンダーランド』沖積舎、1988年）。
- 7) 伊藤里和『夢の深遠 夢野久作論』沖積舎、2012年、p. 3。
- 8) 木下宇陀児「夢野久作の人と作品」（西原和海（編）『夢野久作の世界』平河出版社、1975年）、p. 67。

- 9) 山本巖『夢野久作の場所』書肆侃侃房、2014年、p. 179。
- 10) 田畑暁生『メディア・シンドロームと夢野久作の世界』NTT出版、2005年、p. 71。
- 11) 『詩と電話』の引用は、松本清張『松本清張初文庫化作品集』1巻（双葉文庫、2005年）による。
- 12) 権田萬治『松本清張 時代の闇を見つめた作家』文藝春秋、2009年、p. 32。
- 13) 松本清張「あとがき」（『松本清張全集』36巻、文芸春秋、1973年）、p. 544。
- 14) ミステリ事典編集委員会『ゲームシナリオのためのミステリ事典』ソフトバンククリエイティブ、2012年、p. 186。
- 15) 綾目広治『松本清張——戦後社会・世界・天皇制』御茶の水書房、2014年、p. 12。
- 16) 細谷正充「解説」（松本清張『松本清張初文庫化作品集』1巻、双葉文庫、2005年）、p. 306。
- 17) 『電話男』の引用は、小林恭二『電話男』（福武文庫、1987年）による。
- 18) 註2に同じ、p. 64。
- 19) 『朝日新聞』1972年1月13日、朝刊、13面。
- 20) 『朝日新聞』1980年10月20日、朝刊、5面。
- 21) 『朝日新聞』2016年4月1日、朝刊、1面。